

意見

提言

碓 浩一

幼老共生推進プロジェクト理事長



1945年中国・瀋陽生まれ。九州大学医学部講師、福岡教育大学保健管理センター所長・教授を経て、2001年、碓精神医学研究所(福岡市)を開設。精神科診療の傍ら、日中友好交流子どもキャンプ実行委員長などを務め、2001年、NPO法人「幼老共生推進プロジェクト」を設立。

この豊かな日本社会で、育児困難、子殺し、高齢者の孤独死などを見聞きするたびに、子どもと高齢者を取り巻く人々の愛情が希薄になっていくような感じがします。

モデルだけであわただしく解決を模索しています。おかしな話です。そもそも、子育て、老人の安寧は人間の生活そのものではないで

しょうか。本来人間は、血縁の有無にかかわらず、子どもと高齢者が生活を共有する暮らし方が自然だと思えます。人間は共同繁殖によって存続してきた集団的動物ですが、この人間集団の核とな

るのが幼い子どもと老人のつながりだと思えます。子どもが人として成長するた

は太古の昔から多年齢の、たかだか数十〜150人程度の集団が群れの単位であったと想定されています。ところが、現代の科学技

では、子どもと高齢者が生活を共有するためにどうすべきかはさまざまでも、年月が経てば、そこには必ず子どもを中心とした人のつながりが生じ、自然な人間集団が形成されま

す。この幼老の複合施設を作る手始めとして最適の場所、それは小学校の統廃合跡地です。明治以来、全国津々浦々に造られた小学校が今、少子化や過疎化などの理由で、統廃合されています。私はこの近代国家日本の土

「幼老共生」の施設造ろう

しょうか。

要です。

術文明社会は、人間の有機的な生活集団を核家族にまで縮小させてしまった。その結果、子どもはなにか元気がなく、老人は孤独となったのです。

精神医学者のE・H・エリックソンは「幼いころに高

ければよいのか？ 簡単です。保育園の周囲に心地よい高齢者向けの良質で安価な賃貸住宅を配置すればよい。たとえば、園児20人程度の小さな保育園の周囲に10世帯ほどの高齢者向けの心地よい住宅を設

ける。庭先からたな子どもを眺めて心地よく思う高齢者もいれば、近寄って言葉

の夢を育んだ跡地すべてに、幼老共生のための複合施設を造ることを提案したいと思います。その周囲には小・中学校、医療機関、老人介護施設、そして一般住宅をリンクさせる。地域社会の真ん中には、幼老共生複合施設が必ずあるという社会構造を作ります。

サン・テグジュペリの『星の王子様』に、「愛するとは無駄な時間を一緒に過ごすこと」とあります。たしかに保育も介護も忙しいので、静かな「愛」とは程遠い営為となってしまっただろうです。「愛」どころか、いまや子育て、高齢者保護は社会の重荷のように取り扱われ、税金とビジネス

見によると、おそらく人類

リクソンは「幼いころに高

る。庭先からたな子どもを眺めて心地よく思う高齢者もいれば、近寄って言葉

の夢を育んだ跡地すべてに、幼老共生のための複合施設を造ることを提案したいと思います。その周囲には小・中学校、医療機関、老人介護施設、そして一般住宅をリンクさせる。地域社会の真ん中には、幼老共生複合施設が必ずあるという社会構造を作ります。

大してお金も掛からぬ構造改革です。こうした生活環境で、子育てと高齢者の幸せは何ものにも代えることのできない人間社会の原点であるという自覚を共有できれば、高齢者の年金問題、福祉・介護の社会負担などの問題は、自ずから今とは異なった方法で解消されていくに違いありません。そもそも保育・介護は負担ではなく、それ自体が人間の生活そのものであり喜びであるはずですから。